

武家名目抄 職名部六上

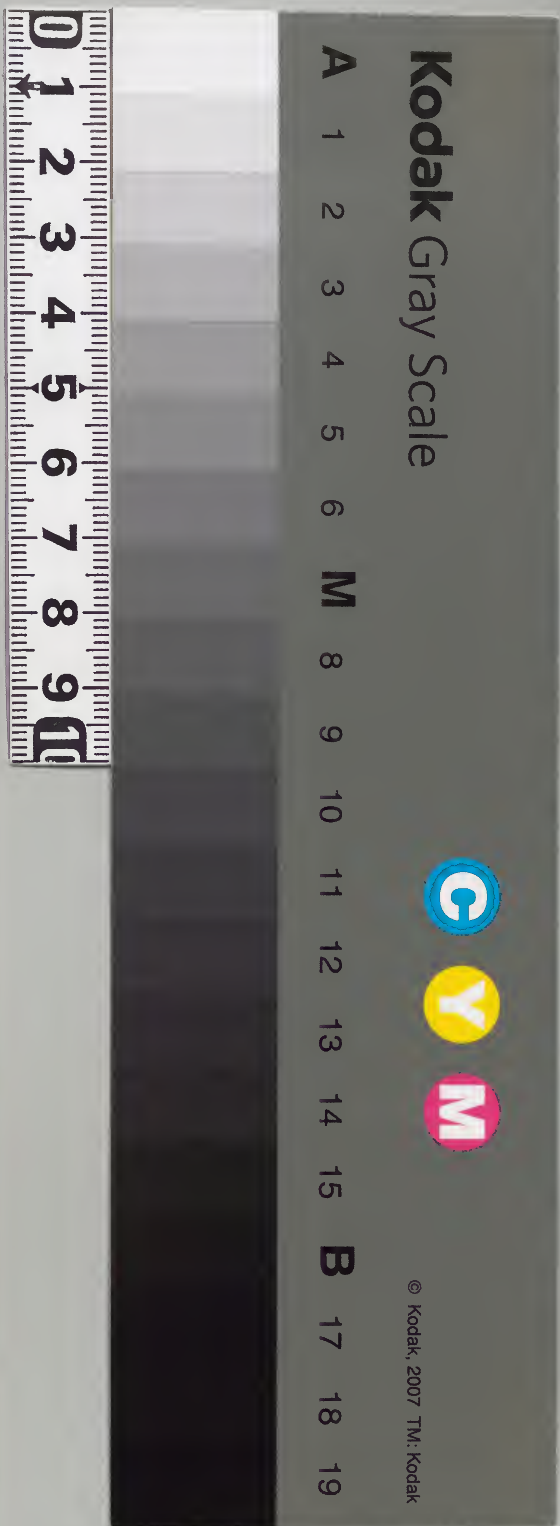
第十二冊

庚

| | | | |
|------|-------|----|---|
| 庫 | 文 | 閣 | 内 |
| 五三兩 | 三六〇九一 | 六〇 | 和 |
| 四一五架 | 冊 | 號 | 書 |
| | | 類 | |

| | |
|------|-----------|
| 内閣文庫 | |
| 番號 | 和 36091 |
| 冊數 | 60 (12) |
| 函號 | 153 276 |

共六十



南241

後見

下家司

家司

家務



職名部六上

石目抄第十二冊

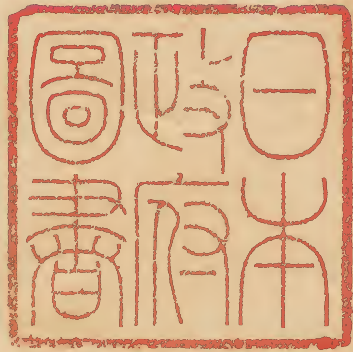
將軍次第云前右大将源朝臣頼朝卿治廿

年後見時政右大臣源朝臣實朝公治十七

年後見時政後義時

増鏡云新巻小のくふ山條の口廊時よきうひはめ

なりそ後ふをのくくゆりあり右廊を



より家といふおとをいさ孫朝とさうゆ大將頼朝
かゝる後見はやうておつきて將軍に宣旨成
ふよる時よさ遠江さといひて故大將ありし
時よりわさくしれうしるこなりしをまいて今を
ふよこのせふれいよく身おもいさあひさふり
うはまふくてうげとるさるさゆなり

將軍執權次第云泰時武藏守元仁元年任義時父
讓補御後見時房相模守元仁元年奉御後見

加合判

吾妻鏡云元仁元年六月廿八日武州泰時始被

參二位殿御方時房相州武州為軍營御後見可

執行武家事之旨有被仰云々

關東評定傳云修理權大夫平時房朝臣連署

承久三年六月入洛以後於六波羅執行武

家事元仁元年六月義時朝臣卒去之間下

向關東為軍營御後見連署

吾妻鏡云仁治二年十一月卅日癸丑駿河
四郎式部大夫家村上野十郎朝村被止出
仕昨日喧嘩職而起自彼等武勇凡就此事
預勘發之輩多之雖非指親昵只稱所縁相
分兩方與本人等同令確執之故又北條左
親衛者令^{時頼}扈候人帶兵具被遣若狹前司方
同武衛者不及被訪兩方子細依之前武州
御諷詞云各將來御後見之器也對諸家人

事爭存惡親衛所為太輕骨也暫不可來前
武衛斟酌頗似大儀追可有優賞云々

將軍執權次第云時頼^{左近}將監寬元四年閏四

月一日讓得舍元經時跡為御後見重時^相摸

守寶治元年奉御後見加合判

吾妻鏡云寶治元年八月一日辛巳恒例贈
物事可停止之由被觸諸人令進將軍家之
條猶兩御後見之外者禁制云々

増鏡云うち雪巻 若志ハそ日ヤうて將軍其真方下
さきかおふなる後ひ頼つくと名けり後泰時其
朝臣もあつて入るしてひまき此時より朝臣不
世をう譲りふくはけひそ天の志このけうし
初んばお揮き時頼の朝臣つうふよつおんいしう
かききそのおは目出度おえのけりてはそ
このもあひ記後を大う世も静よをさほり
すあしあ

旅宿問答云頼嗣將軍ノ御後見最明寺ハ
平時政二男ニ義時義時一男武蔵守泰時
泰時嫡子修理亮時氏二男也舎兄ノ經時
ニ被讓跡成御後見俗人ニテハ相摸守時
頼ト申セシ也天下ニ無隱廉直ノ人也

將軍執權次第云政村陸奥守 建長八年三月
日為御後見加合判按本書連署を以て御後見と
記すハ及止るまじり後々
執權をのこし後見と記し連署を
とと合ふ合判連判加判なとせざる

又云時宗左馬文永元年八月十一日以後

令加連判同五年三月五日以後御後見師

時右馬正安三年八月廿三日奉御後見基

時讚岐正和四年七月十一日御後見事被

仰下守時相模嘉曆元年四月廿四日奉御

後見按時宗以下四人皆執槍あり

梅松論云執槍の次才ハ遠江守時政我時宗時氏

孫時時頼時宗貞時之時以上九代皆以將軍家の

は後見と〜〜政務をPの天下を治免武藏

お揃るふれ書を〜〜職〜〜一族の中の急用を

撰ひ著して御下文下知等を將軍の作らぬ小

依るP沙汰しける

按以上十三條ハ鎌倉將軍家の後見なり

侍所沙汰篇云先例條〜一當御代滋谷小平太

子息二人お云ふ所新頼〜〜處稱令系被盜馬

〜由本間左衛門尉後見一人本間清母〜郎等

一人而小平左自馬を引落〜間依被替賜件

下戸人於小平太々乃即之斬首年中文永略

六年十一月十日被信出々

異本伯耆卷云去應長元年ニ關東ノ執權
相摸守貞時逝去セシカハ息男高時若年
ナレハトテ其間大佛宗宣熙時等加判シ
テ執權ノ司ニ代テ天下ノ下知ヲ成ス中略
貞時最後ノ時長崎入道圓喜并秋田城介
時顯等ニ後見ヲ申シ置ケレハ兩人政務

ニ代リテ代々ノ掟ノマ々ニ行ヒケレハ

如形無為ニ治リケル梅以上二條ハ穩倉殿
の時諸家の後見あり

太平記云師冬自
害條播州師冬八箇國ノ勢ヲ

被催ニ一騎モ不馳寄角テハ叶マシサラ

ハ左馬頭基氏ヲ先立進セテ上杉ヲ退治セン

トテ僅ニ五百騎ヲ率シテ上野へ發向候

ニ路次ニテ憑切タル兵共心替シテ左馬

頭殿ヲ奪奉ル間左馬頭殿ノ御後見三戸

七郎師親ハ其夜同士打セラレテ半死半生ニ

候シカ行方ヲ不知成候又梅師冬ハ基氏の執事なり三戸氏ハ

その親族多ク以て後見をせしうけたるなりと云ゆ

應仁記云若君誕生條持豊入道此御文ヲ給リ

急度思出シケルハ細川右京大夫勝元今

出川殿ノ後見トシテ御父ノコトシ又十

ラフ人モ十ク計ヒ沙汰ス今出川殿公方

ニ居リ給ハク我等カ為ニ悪カルヘシ云

云梅今出川殿といふハ慈照院殿の令子義視なり當時將軍が家督に定まらるゝ今出川は住をり勝元も尚蔵の管領なり故義視の後見をもせしなり

小條五代記云伊豆早雲平氏由来條むう伊勢の由に

伊勢伊勢守平氏貞といふ侍あり小松内大臣

守盛公より十代の後流をりその以系が

公方候より由美君あまの出来給ふといふも

短命にして十もたゞ其皆逝去り給ふ是を

なげきおぼへ給ふ所より伊勢想干公方志

此先祖平家をいしくはるるに後ふを報よ
此息長命なしくはるるに平氏成
石を家老とかく政を取らざるに後ふよ玉てハ
清息長命もろくくと愛さぬに感悦なす免
なしく天下平氏の侍もゆるくと尋えくむ
後ふも伊勢伊勢守志くはるると伊勢
守を石のあせられ家の子と定天下のまじり
た目出度の子孫繁昌よさうに後ふよと云く

伊勢伊勢守らるるの時若後河の國主今川公
氏親系統へ上ると云ふは礼平下ふ玉て伊勢守成の
息女を中女我つ成となしと云ふに後河下り
後いぬ 按伊勢守は代々若君の所傳て伊父と稱し且政不
執事を兼ね殿中の大細事成りけし後ふ家なりを
以てこゝに後見と記せしあり初より引くる應仁記に
細川勝元今出川成の後見として伊父の如く云くと云ふ
をも思ふに一但者よ伊父との
稱し後見といふは其の如し

鎌倉大草紙云憲房の二男民於大補憲顯るる
人者其氏公と稱小路成は兄弟不和のとき

孫小跡後の味方不素一由是初軍内にくく有
けきとも素者才一一人を関東にわたり
け人子あつすんハ叶す一と思召りまふは出
り其上基氏公は乳母子よりおさるは
よまいつれそたよく中ける百青ヲ然申す
越後安房兩國をとりて穩倉の西後見より
山の内後先祖是也

又云應永十七年五月の山崎より公方満兼

沛病氣以て外ふして七月廿二日永年廿二
水早世あり大無く安領胡宗入道禪助は
け君をかゝ一そそり七十より及ぶまで
西後見よりありけきそは吊れ時より
わの影よかへらそ傍衣を忌一則上総國
長柄山胎産すに隠居云々

東亂記云 氏綱公方ヲ 氏綱ニ最愛ノ女ア
聲ニ取ル條 氏綱ニ最愛ノ女ア
り古河ノ公方左馬頭高基御家替ノ晴氏

ノ御臺所ニ成申サントテ此音被仰下氏
綱辞退アリシカトモ重テ御使アリ昔伊
豫入道頼義奥州へ御下向ノ時上野介直
方カ聳ニ成玉ヒ八幡太郎以下ノ君達出
来玉へリ源氏今ニ繁昌ナリ亦頼朝御流
人ノ時時政ノ聳ニナリ御子孫日出度ト
ミエタリ其ヨリ北條モ權勢ヲ九代マテ
トリシタメシ上下目出度吉例ナレハト

カク宮仕ニ參ラルヘシトテ御迎アリ北
條殿ヲ公方ノ御後見ニ御頼アリテ御代
ヲ治ラルヘシトテ両方トモニ御祝著ハ
カキリナシ
按以上三條ハ關東公方家此後見あり
その内とれニ條は冥東爰候をいふなり
太閤記云 秀吉卿与紫田
勝家及海楯起條 勝家与澁川左近將監
一益縁者の事なるはお議一謂ルハ秀吉今

恙君を安去不並をまかのれ後見と志て下れ
裁判自由く至不及是事也然る織田

三七信孝よけり増中と秀吉を押し下さんとし
計りふかして丹羽六郎左衛門尉長秀へ以て趣不
与しこれと申頼りなされ可然いそん名流川
指図有ふし信孝より三宅中記を以て委細了
被作事は長秀を以て信忠を以て然るを
若君を秀吉を取立中をいふと是より始りま
る君を被阜へは其度急度申後見し後
なるふきと思ふゆりては信忠一宮よりおは
り

まゝいりんや秀吉後見を嫌ひ詮やの人を海は不
及ゆとも若君申知稚の言ハ悪口申説絶中りまひ
能く申思惟可然おさんやと申あはれと
興一守との返事ハ

勢州軍記云天正十八年庚寅關白秀吉伐
北條父子滅之依是四維上下悉成其藩屏
木造左衛門具康者為岐阜黃門秀信之後
見賜二萬五千石
按此二條ハ織田
家の後見ナリ

大岡記云 諸奉行并 母衣く流條 大牟 吾家一卿加賀

大納言利家先利中納言輝元備前中納言秀秋

誠後宰相景勝は一人を秀頼に譲りし

殿下世を去給ひるは萬事に入おれ給ふとて

秀次公は切腹の後かく定免おれしとて

細川忠興軍功記云秀頼後由傳守しとて前田

肥前利徳及由彦とて加賀大納言

利家及成りしとて後由彦 按以上二條ハ豊臣家志後見ナキ

一色義貫

應仁略記云左京大夫生涯きしむる者の旨

系於しとて使飛脚松の齒を立るう如し武田

本より荒悟の事也自身一色の陣にまゐりて

私の陣屋に入度ひある由目不熟しきの物と方より

給るし中永陣幸等終日由遊連く窮屋を由先ひ

つらふきの旨甘ことし定むる後一色は後見

羽伏菟頻不然るへくしるの由中留然りとて

既し面を以て領掌れ上は是罪し及とてみゆる

十六日武田陣所より出

舟岡記云政元病氣ノ比一家ノ人々評定
シテ阿波國守護人細川讚岐守之勝ノ息
男アリ是ヲ政元ノ養子ト可被定ヨシ藥
師寺ヲ御使ニテ御契約アリ是モ公方ヨ
リ一字ヲ賜リテ細川六郎澄元ト名乗ケ
ルカクテ澄元モ阿州ヨリ上洛アリ讚岐
守殿ヨリ三好筑前守之長ト高畠興三ト

ハ共ニ武勇ノ達人ナレハトテ輔佐ノ臣
ニ相ツヘラレケリ藥師寺ハ改名シテ三
郎左衛門ト號シ政元ノ中ニ人モ十ケニ
フルマヒケルニ三好カ六郎殿ノ後見ニ
上リ萬ツ藥師寺カ權ニモ不_レ忍有ケレハ
安カラヌ事ニ思テ人々ヨリ合評定シケ
ルハ六郎殿御代ニ十ラハ三好又權ヲト
ルヘシ政元ヲ生害シ申丹波ノ九郎殿ニ

家ヲ継セ各々天下ノ權ヲトラント評議
一決シテ云々

新田老談記云上州桐生ノ城主桐生大炊
助殿ハ御世継ノ御子息依無近國ト云御
一家ナレハ下野國佐野ノ城主天山殿ノ
舎弟又次郎殿ヲ御養子ニ被成佐野ヨリ
御供ニハ荒井主税助茂木右馬之丞山越
出羽守津苅子刑部右四人為御後見付来

諸仕置ヲ任セ家臣ヲ勤ル也

會津四家合考云 岩城常隆 逝去條 佐竹義重ハ古

殿ノ御一門ナレハ彼三男忠次郎殿ヲ御

養子ニナシ進セ義重ヲ善キ後見ト頼進

セニ岩城郡ノ内ニ於テ何者カ愚意ヲ

先ニスル者ノ一人モ有ニ云々

小條五代記云 岡山孫五席木 下源蔵討死條 義武者ハかるゝ

世々忽の働あり其一いゝさ私交之上分別

うましく吾等のわさよへ那ー去程よあき
者よ然るつき後見付るはか根の時れ為也

井田氏文書云今度牛久夜迎て其是之甚内

其後之名は後忠位也云云以年よ武者は後

比得る情宗は理々御可有之好は万計打死根

其の方見指し書一以留候有てて下中も

忍く流る正月十八日井田因幡友氏政 花押○按

小條云代記を照考するに因幡の甚内の後見をうけ
治るるなり故ふ文後見の字ありとて之も友に

載る後考ふ備ふ井田氏は上総水坂田乃
領なり牛久地ハ常陸小あり

駿府記云慶長十六年十月六日巳刻為御

放鷹令赴關東給九日本多佐渡守為御迎

出向有江戸御雜談 本多上野 幕府御後見

也

按後見ハ輔佐の義なり其の故ふ後見殿此

時ハ執符の人をよめて後見といひ連署の

職を承けし後ハこれをも併せて后後見と

稱きりふ但將軍執權次第に記す所を
見らば時頼政村よみてハ執權連署いつれも
治後見とみてそれより後ハ執權をのこ治後見
と記し連署其人をハ合判加判ふと注
して後見の稱をのこす因ら思ふ
時頼政村の以より後おまうせさう治後見也
呼ぶる執權ハ限まるかくなりしと又これを
ふまけし世をゆるすハ執權の威權いやまし

け目には連署と等級を降さる勢となりて
おのつら治見といふ名稱のまくなれる故
なりし。足利殿に時よむりてを先代に
あらひて爰領の事を治見といふも
昔しと当時管領の外に傳の職するもの
をも後見といふといふたれハ爰領のもの
限れる名稱よるハなるとなりしと
名目と言辭の上にいふなりしと稱呼

にてふしき職名ありぬハ將軍家の外大名
諸家もも大家少身共別かく輔佐の人をば
さうとふへしなり又ち一國一郡のこころ者
いふく幼弱ふして家勢を振ふるふ場され
時を一门同家とくは姻家と託して
家政を補助せらるるをも及見といふ或は
之命によりてその者の者を振ふる為と託を
らるる武士をもさういふ事ありかく名称

同く志て志ぬ美なるのあつはと正しき
職名よありある故なりんうと見えといふ
名ハ猶ふくくもそのにえとれと後念に
せよ先くくくくくく漏るる

家司

吾妻鏡云建久三年八月五日乙巳令補將_{頼朝}
軍給之後今日政所始則渡御家司別當前
因幡守中原朝臣廣元前下總守源朝臣邦

業令民部少丞藤原朝臣行政案主藤井俊
長知家事中原光家大夫屬入道善信筑後
權守俊兼民部丞盛時藤判官代邦通前隼
人佑康時前豐前介實俊前右京進仲業等
候其座千葉介常胤先給御下文而御上階
以前者被載御判於下文訖被始置政所之
後者被召返之被成政所下文之處常胤頗
確執謂政所下文者家司等署名也難備後

鑒於常胤分者別被副置御判可為子孫末
代龜鏡之由申請之仍如所望云々

按家司の内
廣元以下

光家以下至八人の政所の下文は加署する事なり善信
以下仲業以下至七人の同注は執事公事なり人等なり

實朝

又云建仁三年十月九日甲辰今日將軍家
政所始也午刻別當遠州時政廣元朝臣已下家

司各布等着政所民部丞行光書吉書令圖
書允清定成返抄

又云文曆元年七月六日仰家司等召起請

是奉行事不謂親疎不論貴賤各存正儀可
致沙汰之趣也其衆十七人前山城守藤原
秀朝前山城守中原盛長散位大江以康散
位三善康持民部大丞三善康連中務丞大
江俊行彈正忠大江以基大膳進大江盛行
左衛門尉惟宗重通兵庫允三善倫忠藤原
頼俊沙彌行忍惟宗行通三善康政
○改康宗
○按この内
康連ハ評定元なり其餘ハ改評
問は不_レ与評の家人と云々なり

花營三代記云康曆二年十二月十五日右

大将^{義満}家御拜賀散状并路次儀中家司總奉

行攝津掃部頭能直按能直を評定元なり家司
惣奉行とは家司少て評賀れ

惣奉行をうけ
給ふなり

普廣院殿御元服記云永享二年七月廿五

日甲子大将御拜賀供奉行列出仕人々伺

候次第并蹲踞中家司役掃部頭満親為先
規歟

固小路按満親ハ能直の男能秀
の子なり評定元なり

慈照院殿大将并賀篇目云武家奉行人攝
津掃部頭之親可致沙汰條、注折紙遣之
御并賀條、一供奉人等御訪用脚事一御
後官人三人事一衛府侍十人事一帶刀十
二番事一御路掃除并浮橋事一地下前駈
番長一負御馬十四匹事一同御総被付連着十
四具事一移鞍四具事以上先度所見如此
此外一騎打人、事侍所供奉并辻固事同

申御沙汰候歟政所奉行可致沙汰條、注
折紙遣飯尾下総守為數許御并賀條、一
鋪設翠簾長筵等事一隨身所幔事一御笠
持并御笠袋御茵等事一御沓柳管事一松
明事以上 按之親ハ滿親の子なり其家業多きを
以テ家司及惣奉行を勅仕せしなり故ニ
此文家司の文なりといへども亦小収正但此ハ常子
評定所奉行人等をさして家司といふ辭ハ絶たさむ
なりて可系規武の時ハ隆と稱は氏をいへば及を勅仕
せしむる例とあるより以上二條の家司及之か志より

足利家官位記云鹿苑院殿義永和四年三

月廿四日任權大納言同年八月廿七日兼
右大將康曆二年正月五日叙從一位永德
元年四月廿九日補家司七月廿三日任内
大臣按此小家司と云ふは評定所を以て
おろしあつて鹿苑院殿播紳家の例に准し公家此
官人を以て家司不補をらるゝを不叙不補文に注載
せしなるさまは名稱同一といへども其実ハ異なり家を
志すなりと云ふより下拾芥記に於て
教條皆志より程後の案中に云ふなり

薩戒部類私要抄云右馬權頭康任為室町
殿職事

實前關義持前内大臣殿仰送消息云來月九日
白家人

為寶幢寺供養大臣可有御出為前駈下可令
參仕給上之由被仰下候也恐惶謹言後正月
八日謹上中山中將殿右馬權頭康任於公
卿者家司藏人權辨宣光相觸之件狀云來
月九日可有寶幢寺供養可令參仕給下之由
前内大臣殿御消息所候也仍之如件傳聞
旨如此猶可尋注也按此是應永
廿七年ノ事
普廣院殿大將拜賀雜事云一奉行人等事

家司丞相御拜賀之時被補之雖然今度為家司催沙汰此儀攝政所被計申也云
丞相御拜任已前云職事同所司同一御所
康曆佳例不及沙汰侍一政所一下家司一下召使一廳召使數人
不定也今度召置一人召遣
嗣光者也○按嗣光ハ家司ハ

普廣院殿左大臣拜賀記云永享四年八月

廿八日室町殿内大令轉左大臣右近大十

二月九日左大臣殿御參内有御參賀儀次

御參仙洞有御拜之儀云々申沙汰傳奏萬

里小路大納言時房卿奉行家司頭右大辨
忠長朝臣也辨少納言兩局等參候床子座
兼日被催之載折紙傳奏被伺申任御點被
催之

薩戒記云永享四年十二月九日甲午今夜

左大臣殿轉任拜賀并着陣中略御拜賀并御

着陣御次第當日家司覽日時勘文次御裝

束を着給次御參内の儀例のふと

足利家官位記云慈照院殿義政寶德二年三

月廿九日任權大納言享德二年三月廿六

日叙從一位康正元年八月廿七日兼右大

將長祿二年四月十六日補家司同年七月

廿五日任内大臣

康富記云寶德二年七月五日丁未是日室

町殿著直衣御參内也未剋出御於正親町

東洞院與土御門間打陽明門代於此所有

御下車迂固如例還御秉燭也御出奉行布

施民部大夫貞基飯尾左衛門大夫為數兩

人也傳奏中山中納言有輕服今度不被出

仕申仍藏人權右中辨綱光為家司被奉行

之公卿殿上人地下前駢衛府侍帶刀衛府

長官人等交名已下悉見散狀了中略公家散

狀之端作御直衣始扈從公卿如此武家奉

行書出散狀之端作御直衣始御參内供奉

帶刀如_レ此_{アリ}

慈照院殿大將拜賀篇目云康正二年二月
十六日丙辰參室町殿被仰下云来七月幕
下御拜賀事可申沙汰者可為永享度御例
者申畏承之由_{中略}兼日可伺定事一奉行家
司事_{永享度親光御記云丞相御拜賀之時}
政_{補之}雖_然今度為家司催沙汰此儀攝
計_{申也}永享度藏人權右少辨嗣光也今度
若可為藏人左少辨兼光歟之由伺申之處

先雖不_レ念可被相定仰之由被仰下之二月
廿六日四月十四日重伺申候處追可相仰
云：六月十一日可為益光之由被仰下之
則於御所面示之了一武家奉行人事四月
十四日伺申之時攝津掃部頭之親飯尾下
總守為數也此外猶可相加歟之由可尋攝
津之旨有仰後聞松田丹後守相加之了了七
月六日藤中納言_{永豐}示送云攝津掃部頭之

親四品事今日中可有申沙汰之由有仰者
答畏承候之由則殊奏聞宣下事下知藏人
權右中辨益光了中奉行家司可沙汰條
可注給之由益光示之間六月廿七日注遣
之折紙也兼日一參陣上官可被觸仰事一
兵部省移文當日可持參之由可被仰事一
可儲陽明門代之由可被仰官事一當日射
限可被相觸事當日一早旦可被奉仕御裝

束事一可被書進散狀事一可被覽日時散
狀事一可被進兵部省移文事按此是中山
大納言親通

卿記

義政公記云長祿二年七月廿五日庚戌今

日有任大臣事太政大臣持通關内大臣予

右近權大納言藤原公敦元權權中納言藤

原信量元三位參議藤原公躬元藏人頭右
中將等也

予設饗祿凡大臣大饗近代諸家中絕不行

之而永德元年七月廿三日鹿苑院殿任内
大臣給永享四年七月廿五日普廣院殿任
内大臣給皆被行之任彼例今度所設之也
中略於陽明門代乘車經本路歸里第入閑門
也東面公卿以下直入西面歟此後良久尊者
右大臣來臨尊者直昇中門廊南切妻經中門
廊并對代南弘庇寢殿西南箕子入當間東
二間也被着横座西面次予自東方經箕子着

親王座北面次諸卿次第昇中門廊切妻經箕
子入南面一間經座末并後着奥座東上南
將久我大納言九條大納言今出河大納言
三條大納言西園寺大納言中山大納言帥
大納言日野大納言新大納言別當
等也但帥大納言為行事即起座着端座
之人各入當間自座後着之東上北面山科
納言新中納言中納言中將源宰相次并少
中將左大弁宰相公躬朝臣等也
納言同昇切妻着西庇座南上東面今日出
朝臣少納言宗賢朝臣左中弁益光朝臣少
納言顯長朝臣長清朝臣右中弁宣胤左少

弁俊顯右少次外記史同昇切妻着對代座
弁顯任等也
東上對座大外記中原師藤朝臣少外記清
原忠種中原康顯權少外記中原康純清原
賢親以上著北左大史小槻晨照宿禰
長興宿禰左少史高橋俊職以上著南次五
位家司主水正業隆并下家司主計允中原
盛富紀季廣同益廣中原盛季等著酒部所
床子今日雖降雨不及移酒部帷立次前左
京大夫相豐朝臣取簣薦二枚參進並敷尊
者前即留候勤陪膳俊宣兼益昇机一脚立

十二之廿六

簣薦上次又康宣久任昇今一脚相並立之
則居肴物役送同前陪膳取之居机諸卿机
兼立之居肴物例云永德永享
親長卿記云文明十八年正月十六日自右
中弁政資朝臣許送使者民部大來七月御
拜賀頭弁供奉并申次床子座等事可存知
東山殿為御例云政資朝臣為室七月廿
三日室町殿御拜賀今日延引可為來廿六

日云々家司政資以回文相觸諸篇不事行

之故云々廿九日今日室町殿廿二歲去右

大將御拜賀也魚日次廿三日延引廿六

右中弁政資朝臣觸之今朝又酉下尅許可

送使申次御前召可存知云々略殿上

已尅之由魚御出門云々扈從公卿

日相觸之西洞院右資氏

人元長朝臣頭左時顯朝臣兵衛督

王伯通世朝臣中院光忠朝臣葉室古大弁

俊名朝臣會參家幸清閑寺右少辨參賢房萬

小路參會今日申和長東坊城參會餘十人

侍中拜賀云々一日家司の役を

拾芥記云文龜二年七月十二日武家御參

內有御昇進御四品并宰相中將雖可為陣

義依無要脚消息宣下也今日午刻持參位

記於室町殿入室町殿東面妻戸相跪渡位

記入葛蓋於家司侍從家司自南面妻戸御

簾下渡之女中女中取之持參被覽位記納

砂金裏於蓋如元自簾下被出之家司渡之
予予取之出妻戸右廻退出

又云永正十八年七月六日室町殿御兒自

播州為浦上調法御上洛也細川右馬頭以

下參御迎廿八日御叙爵從五位下御名字義晴管

大納言和長勘進分也今日午刻大内記為

康參陣自是直持參御位記宿紙如例入葛

蓋路次紫輿入位記蓋於輿中下輿之時令

持雜色參進之時副使兵衛尉行為自雜色

手取位記葛蓋授大内記大内記渡家司藤兵

衛督永家司渡之於簾中女衆女衆取之被

參御前歟按以上十二條八室町殿の時公家の
官人を以て補きし家司なり

宗又大双紙云人の被官主人の侍や幸の方へ

書状を考し時文章いかにとみんさん小

書てい箇等々い等々趣了由披落し及

得之と書へ一充所を家司の名義家司は

人をとすすハ人々山中或は居所或何處
由屋形と書居一之時ハ忌懼傳云と書一し
さうし書居うゝ

未森記云能登越中境目荒山ト云所ヲ取
出ニコシラへ能登七尾ノオサへトシテ
袋井隼人は神保安藝守家司也神保方
ヨリ此城ヲ取立ニヨツテ也 按以上二條ハ
宥老中をふとふたふと
一家忠家長をいふたを

按家司とは古代職事の三位以上の家小
祇儀をさる家令以下書吏以上の者をいへり
家令職負令より一一位ハ家令一人技一人從
二人書吏二人二位ハ家令一人書吏二人三位ハ
家令一人書吏二人從三位ハ
家令一人書吏一人ハ
三位以上といへども大序小任はつき家小ハ
はまハ大を補きし
但每家一雜掌と
いふものを並て家事を
辨せしむれ古の
家司ハ類をい
はる大序家司は家令の上に
別當をさる加えて家政をいふはしむ習いと

多し形子頼朝將軍大將不任一給ひ一後
大臣家此例不准一別當令案主知家事
等を定ま政理を弁さ一しつ事とありて
あましを家司と稱せり又別當令を
帶せぬ評定元引舟元政所同注下のあ寄人も
皆公事を奉行する故ふく又家司と
稱せり足利殿の時ふと穩念れ如く評定元
引舟元あ寄人をも定まて此礼を家司と

稱せ一に鹿苑院殿の比よりそ名稱ハ何々絶する
ふと一なりて大儀を初るる時ふのと評定元の
内之儀をつうさそ家者を家司役とす一が
こゝろなれり
評定元の内より梅津氏の家業とあるが
由ハ本文より見る可こと一もとふれ評定元
を世々よ繋ぐ家
なりとるなり 其由来を思ふは鹿苑院殿と
毎事花英を好むと大うこ公家の式り
准擬をせしれ一うは但大將の後継家大臣家此
例より一と縁免公家忠官人を以て文不

家司は補きられしより家司の稱を彼方に
うつり評定引付の衆等をもりて常は家司と
云ふことばえすありし形より一普廣院殿
慈照院殿何れも其例を違れしより世に
將軍悉く友家其人を以て家司は補さけらる
素より元より此れ輩を武家の政務を
扱はるべきものなりしはたはさるべき
只將軍家津賀以下より儀式の時公家志

言にかゝまる事をも執りし武家方に
つきるべき評定を評定を執る人等沙汰する
事たりしはたは大儀を執るべき時ハ家司と
いふ内は評定を執る者と友人をいふと
あはれなる官人の家司と大なる職掌ある
位位の小なる室町殿の季母といふて
大名諸家も家務を扱はる者を潜稱して
家司といふ事いひてきこゆ

下家司

相國寺供養記云明德三年八月廿八日丁

丑今日萬年山相國承天禪寺供養也中有

衆僧御布施事奉行飯尾美濃守中澤次郎

左衛門等調之渡下家司為景納長櫃昇被

准御齋會之間職事皆取御布施

薩戒部類私要抄云右馬權頭康任為室町

實前關義持前内大臣殿仰送消息云来月九日

為寶幢寺供養大臣可有御出為前駟可令

參仕給上之由被仰下候也恐惶謹言後正月

八日謹上中山中将殿右馬權頭康任来月

九日為寶幢寺供養可為御出供奉事奉了

存知候也謹言後正月八日左中将定親於

公卿者家司藏人權辨宣光相觸之按此礼

七年なまごころ子室所殿職事と
あふり下家司のみせあり

普廣院殿大将拜賀雜事云一奉行人等事

家司丞相御拜賀之時被補之雖然今度為家司催沙汰此儀攝政所被計申也云
丞相御拜任已前云職事同所司同一御所
康曆佳例不及沙汰侍康曆度著淨衣二人一政所一下家司一下
召使康曆度十人也應永度一廳召使人數
也今度召置一人召遣嗣
光者也○按嗣光家司云
薩戒記云永享十一年八幡御參詣條々三
月四日要脚事如先々可仰播磨守歟之由
伺申之有御許諾但被仰御參詣未定之趣

云々五日召下家司盛繼仰御社參可為來
廿一日任例可催沙汰之由了六日番頭出
納來申御社參事自下家司方相觸之可致
用意之由十二日御社參下行物注文今日
可遣之由示赤松播磨守滿政於御所參了
件折紙云八幡御參詣總用之内御輿修理
料五百匹諸大夫二人御訪三千匹各千五百匹
下家司御訪三百匹番頭六人御訪千八百

匹者三退紅仕丁裝束料三百匹廳召使御
訪百匹以上六千匹右要脚事可有下知候
也恐、謹言三月十二日赤松播磨守殿定
親如先、加以下家司盛繼遣播磨守許了
十三日刑部卿有重朝臣來云只今於路次
所參會赤松播磨守也自廿一日御參籠北
野廿七日可有八幡御社參由被仰下此系
内、可申之由所示也者答悅承之由了御

社參下行物六千匹事取播磨守伊勢守等
折紙付正實坊之處無要脚之由返答可如
何哉之由下家司盛繼來申以此旨示播磨
守可返折紙之由仰含即歸來云返進折紙
了何樣可談合伊勢守之由所答也者十四
日於御所有重朝臣云依召所參入也來廿
七日相當北野御參籠御滿參日而為減日
何不申子細哉向後不申如此之事者可有

御責勘隨而廿四日卅日兩日之間八幡御
社參可為何様哉可注申由被仰下之北野
御參籠日廿四日戊申八幡御社參廿四日
卅日甲寅注進之者御社參日兩日之間未
定云々廿日御社參方六万匹之内且三千
匹自御倉請取之支配下行之由盛繼所申
也廿八日御社參總用錢今日悉下行之由
翌日盛繼所申也廿九日召盛繼明日御出

十二之卅五

事寅刻可催具之由仰之了卅日卯刻自北
野御還向還御室町殿辰半刻御出按代記
乃中山

大納言定親
乃日記なり

又云嘉吉三年六月十五日己亥今日奉為

普廣院贈太相國第三回御法事来廿四日
相當御正

日於醍醐三寶院被行曼陀羅供阿闍梨前

大僧正義賢職衆廿口交名
在左執蓋民部大輔

匡祐執綱前大膳權大夫匡重朝臣兵部權

大輔相豐朝臣已上兩堂童子匡祐丹後守

宗經已上皆等予仰下家司盛繼催進之了

綱所并家司已下不及參向依阿闍梨命也

去年已來如此也一事以上如去年周忌御

法事廿日甲辰自今日於等持寺被始行御

八講來廿四日相當普廣院殿第三回御正

日以件日被當結願日後年每年可為此定

也予申沙汰之公卿并御布施取殿上人以

消息催之頭右中辨資任朝臣每日參入行

事於堂童子等者仰下家司盛繼令催之僧

衆仰綱所如先、早旦書散狀遣頭右中辨

資任朝臣許早參可申沙汰之由示之

建內記云文安四年正月五日戊辰叙位議

也云、叙人小折紙冬房寫送之在左中從

五位下中原盛繼舊院廳官也室町殿下家

故為景入道次男也兄盛伊勢左衛門尉也

尚逝之後為相續者也

慈照院殿大將拜賀篇目云御訪事一地下
前駟一御隨身一權御隨身一番頭一牛童
一副御牛飼一釜殿持雨皮一御雜色一下家
司一一員一居飼御厩人

親長卿記云長享二年四月六日藤中納言
入道来可張行明日御會事人々尋之申治
定之由又勸修寺大納言申松明事主殿大
夫并下家司等申付候處主殿大夫申非禁

裡御儀進上事無例候間不可叶云々下家
司院無御座候時被付進室町殿之間難進
之由申候云々

按下家司ハ即家司の下司なほは總舍殿此
時了政所此案之知家事といふもの共乃
職掌小ありしに 政所令ハ正しく家司の職小して
長官なり案之は職貞令了
いよ由る書吏小ありしに知家事ハ従の職小相當なる
とのるもハ令下司しる事推て志るなり
然もとも下家司と稱せしむと右書後ハ

絶く不見か—但別尚令案主知家事等を
なしてハ家司と記—方々亦よりて其四貞を
等是よりとは案主知家事ハ即下家司なり
足利殿の時家司を補はるといふて—とといふ職を
下家司も其内ハあるを思ふ也—
うけ給はる輩と引付るハのはさきさるすち
まゝかのつゝ家業志尊界あり又改所
問注下の南寄人れ中にも引付るはさされさる
族あるはさるも准していゝ下家司家司
族

至先と何れもと尚時を称はえさるは金六
定免云至は是利殿の時より至りては
改所ハ貞れ職号も設けられは下家司と
いふ称謂は—常より—さるこゝろ
なりけりもさるこゝろ下家司といふ名ハ
さうけるを前條もいひ—かく庶苑院殿れ
時より公家ハ官人を家司に補はるる
なすひさるりて下家司をも同時に定められ

——うは官人の内にて侍乃級ふあるまゝ系
者をもて其職に侍りて——なる侍ハ六位
の者なり
後六位に進まきけしあるに知家事等これ如く
むしあり
家務を振ふる者ありては六代を以てする
時而没あるは之なるに其職掌と大概家司と
准りて——於前條と照校して互に其
大務を以てする所なきを得

家務

徳倉大草紙云寶徳元年十一月晦日法不出来
由移あり永壽王殿由元服ありて九馬頭成氏と
中龍若丸八上杉右系亮憲忠と号し其頃
山内ハ憲忠若輩由長尾九馬門尉景仲諸事を
名代小執りて扇谷ハ依理大支持朝なり是も
世に中大切と思ひりれハ出家して道範と号し
子息淳正ハ彌弥房ハ家督を渡し憲忠を聲
と武州河越ハ隠居しと有る事不詳なり

顯房若年此有家臣武州尾越の太田侍中守

資清政務小替りく諸事を下知しけり按長尾太田

山内扇谷の家替職をて下に引ふる諸書を以て記しるなり

荏柄社所蔵長尾景信贈太田道灌状云

今更於涉身上可被興新儀比之候何事也哉

懃景信相當尚方家替職比之間於當家滅亡

之候者不顧一身歎好比之可雖何侍輩身上也

可執申也

按尚方とは山内と移をいふ景信の系仲好子なり

又太田道灌贈寺尾若狭入道状云抑由家替

職事忠景江在作出比先以目出度作於

今度す被申沙汰不可有餘儀比有自去頃

申来比随而尚ふく事す景春方へ作出比松

自典厩換は取合比小簡要比比一候被相、

比方便了然比由膝下祗候比も猶難説く不

可有比期比

按尚ふく事云くは武苑を後代乃子をいふ武苑は上杉家を後のふあり

景春々景信の嫡子なり

松陰私語云景信他界以後景春歿定小月市意
條不被感父祖忠信歿小内家督之事寺尾
入道海野佐渡守相談長尾尾張守中成因茲
系妻述懷於武相上中も系妻同道被官之
者尤對尾張守合懋討憤者二子余於國家
蜂起充滿按顯定ハ小内上杉
志家督形利
鎌倉大草紙云文明六年十一月廿四日上杉扇谷
の大將修理大夫政直も打死なりけり

子なうりくは一家の老長有評定して故持朝
此三男定政を修理大夫小任一扇谷の家督と
なり扇谷の家督ハ太田左衛門入道道灌小内此
家督長尾左衛門景信入道此間も尾尾張守忠景
子顯定も被中付爰了長尾四郎左衛門尉
景春ハ老尾一家の大名として有勢の者也殊小
老父玉泉庵忠功異他然同系妻わきりて
家務職を可承處に忠景も其誠天性後惡友

男にて逆公忽よおしむ立願定とて亡企おは孫知
立縁者たるの同太田道灌よい事を相談と道灌
是を以て一大事出来ぬと思ひけむハ願定
のおふゆてやけるハ系表とてしるも守念用
よく御家務職ハ及ゆ得とも父玉泉
忠功を思ふゆす武義の中後代とて御身先忠系と
和談仕忠系も暫時遠去ハお退云々

按家務といふは一家の執事として家政を

操行するとのをいふは一社の長官を社務と
いふ一寺は長者を寺務といふるは
本文小見する長尾右田村二氏ハあ上杉
家ハ執事なるは凡そ家の家令として世々
政事に預るもれ各ある家あり山内家ハは
長尾大石扇谷家ハは太田上田等なり申
しも長尾太田等其上首よく執事ハ職を
せしむるを以て一家ハ世々を以て家務と

称は俗間或は称して執権といふもの
あり其事ハ執権及執事
係りし是之ニ由り殊に寶徳以来ハ二氏
何きハ威權を習ふ一陪臣を以て関東志
士余を以る不玉は是事ニ由りハ穩念此
季世ハ小條家忠家令長壽氏政事成
恣にせしに似るを以て関東諸家の内ハ
ハ職号ハ中なるハハ早竟ト杉家に
倅ハ故なるなり

武家名目抄第十二冊

十二
百

